

テキスト ルカによる福音書15章11～32節

〈父の愛のたとえ〉

ルカ15章11～32節に記されているイエスのたとえ話は「放蕩息子のたとえ」と呼ばれています。しかし、後半の25～32節も合わせて考えるならば、「二人息子のたとえ」と呼んだ方がよいのかも知れません(11)。このたとえ話は、「徴税人や罪人」だけではなく、「ファリサイ派の人々や律法学者たち」をも念頭に置いて語られているからです(1-3)。しかし、前半の“弟編”と後半の“兄編”を一つのたとえ話として結び合わせているのは、「この息子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」(24,32)と言って弟息子の帰還を喜ぶ父の愛です。失われた者を探し出して慈しむ父の愛です。そのようにこのたとえ話を読むならば、内容的には「父の愛のたとえ」と呼ぶのが一番よいのかも知れません。

〈父の愛と弟息子〉

当時のユダヤ社会においては、父親が死ぬ前に遺産の分配をすることがよくありました。ただこの場合でも、父親が生きている間は、父親がその財産の使用権を確保するのが常でした。このたとえ話の兄息子の場合、財産の分け前にあずかりながら、なお父親が使用権を持っていたようです(31節参照)。しかし、弟息子の場合、財産の分け前にあずかりますと、日たため内にすべてをお金に換えて、「遠い国」に旅立ってしまいます。このせつちぶりにはあきれてしまいます。案の定、滞在先の国で放蕩に身を任せ、せつかく貰った財産のすべてを使い果たしてしまいます。この弟息子が「遠い国」に行ったのは、自由と独立を求めてのことであったと思われるのですが、同時にあらゆる面で父親の支配から逃れようとしたために、身を持ち崩してしまうこととなったのです。自由と独立を得るところか、それとは正反対に、

罪と悲惨の奴隷となってしまいます。弟息子の場合、父子の絆を断ち切るような仕方では自由と独立を求めた結果、「失われた者」となってしまいました。

しかし、罪と悲惨のどん底生活の中で彼は我に返り、父のもとに帰りたいと願うようになります。17～19節と21節を比較すると、後者には「雇い人の一人にしてください」が欠けています。父親が帰ってきた息子の言葉を遮るようにして、祝宴準備のための指示を与え始めたということでありましょう。父親の喜びがどんなに大きなものであったかがわかります。神はたとえ私どもが完璧でなくても、悔い改めの一步を踏み出すならば、喜んでご自身との交わりの中に受け入れてくださるのです。

〈父の愛と兄息子〉

兄は、父親との関係において、ある意味では模範的であったと言えます(29a)。しかし、問題は、父の心を理解することなく、表面上父の言いつけを守っていたに過ぎなかったという点にあります。この日も兄は戻ってきた弟のために祝宴を催した父の喜びを理解できないうで、祝宴に出ようともしません。彼には、「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったから」(32)と言って、皆で楽しみ喜ぼうとする父の心がわからないのです。その意味でこの兄息子も心では父から離れており、この点で弟息子と同じく「失われた者」でした。

しかし、父親はこの兄息子に対しても等しく憐れみと関心を示しています(28)。イエス様が当時のファリサイ派、律法学者たちを念頭においてこの兄息子のたとえを話されたことは明らかです。(宮崎彌男)

テキスト ルカによる福音書15章11～32節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問21、67

〔単元のねらい〕

よく知られた放蕩息子のたとえには、聖書全体の要約とも言える内容が込められている。父なる神のもとを離れたゆえの罪の悲惨と、父なる神のもとへ帰ることこそが救いと祝福であるということをストレートに伝えたい。すでにたとえ話の内容をよく知っている子供たちにも、父と二人の息子のそれぞれの立場・気持ちなどを深く考えさせることを通して、登場人物たちに自分を重ね合わせて理解することができるようにしたい。そして、一人一人が実際に罪を離れ、父なる神のもとへ帰ることができるように導きたい。

「神さまの家に帰ろう」

ある人に二人の息子がいました。その人はたくさんのお金を持っていました。ふつう、お金は、親が死んでしまった後に子供たちにゆずり与えられます。しかし、あるとき弟は、自分がもらえるお金を今もうくださいと言いました。そして、お金をもらおうと、さっさと遠い国に旅立っていきました。弟は先のことを何も考えず、今お金がたくさんあって、楽しく暮らせれば良いと考えたのです。すると案の定、お金を無駄づかいしてしまって、お金は全部なくなってしまいました。

みんなはおこづかいをもらっているでしょうか。お金はよく考えて大切に使うなければいけません。何も考えず、好きなものを好きなだけ買っていると、本当に必要なものが買えなくなってしまいます。

必要なものとは例えば食べ物です。弟は、お金を無駄づかいしてしまい、ついに食べるものにも困ってしまいました。飢饉まで起こって、食べ物がなくなってしまったのです。弟は豚の世話をする仕事をしましたが、しかし豚が食べるいなご豆さえ食べることができませんでした。

弟の間違いは、ただお金の使い方にあったのではありませんでした。父親のもとを離れて、自分勝手に自由に生きていこうと思ったこと自体が、間違いだったのです。そして、この弟の姿は私たちに何を教えているか、分かるでしょうか。これ

は、父なる神さまのもとを離れてしまったすべての罪人の姿を教えてください。罪とは、神さまから離れて自分勝手に生きること、そして私たちをみじめな姿にしてしまうものです。弟はお腹が空きました。そして、満たされなかったのはお腹だけではなく、心もまた満たされず、寂しく不安な気持ちになったことでしょう。私たちも神さまから離れてしまうとき、体も心も満たされないのです。

しかし大切なのはこの後です。弟は、そのようにみじめな姿になったとき、初めて自分は罪を犯したということに気づきます。そして、お父さんのもとに帰って、もう一度やり直そうと決意します。私たちも、自分のみじめな罪に気づいたなら、その後が大切です。弟のようにはっきりと罪を認め、悔い改めなければいけません。

そして、弟がそのように決意して家に帰ると、父親は温かく弟を迎えてくれました。このときのお父さんの姿はとても印象的です。弟が家に向かったとき、まだ遠く離れていたのに、お父さんの方から弟を見つけ、走り寄ってきてくれたのです。ひょっとすると、弟にはまだこのとき不安があったかもしれません。勝手に家を飛び出して、財産まで使い果たしてしまった自分を、お父さんは家に入れてくれるだろうか。しかし、家に帰ったとき、お父さんの方から走り寄ってきてくれ

たのです。そして、食事でお祝いまでしてくれたのです。お父さんにとっては、いなくなっていた弟が帰ってきたということがとてもうれしいことだったのです。

私たちにも、教会に来て、神さまを信じていても、ときどき不安があるかもしれません。神さまはこんな自分を本当に愛してくれるだろうか、受け入れてくれるだろうか、という不安があるかもしれません。お祈りしていても、心配になることがあるかもしれません。でも、この放蕩息子の父親が走り寄って抱きしめてくれたということを感じていてください。神さまの方から、私たちのもとに走り寄ってきてくださるのです。それは、神さまがイエスさまを私たちのもとに送ってくださったということにもあらわれています。神さまの方から私たちに近づいてくださるのです。だから安心して、私たちは父なる神さまのもとに帰っていけるのです。

さて、このたとえ話には、兄のことも終わりに出てきます。そして、この兄も実は父のもとを離れてしまった者として出てきます。確かに兄はずっとお父さんと一緒にいたのですが、弟が帰ってきて、お父さんが喜んでのを見ると、とても怒ったのです。今までずっと従ってきた自分でももらえなかったような子牛の食事で自分勝手な弟を迎え入れたことに腹が立ったのです。不公平ではないかと思ったのです。そして、兄は怒って家に入ろうとしませんでした。兄もまたお父さんのところから離れてしまったのです。お父さんから離れ、お父さんに文句を言ったのです。

しかし、お父さんはこの家に入ろうとしない兄に対しても、自ら出てきてなだめてくれました。そして、兄の言い分を受け止めながら、大切なことを語ってくれました。それは、今まで兄はお父さんのものをすべて自分のものであるという祝福にあずかってきたということ、そして帰ってきた弟を喜ぶのは当たり前のことではないか、ということでした。つまり、お父さんは決して不公平をしているのではないのです。そして、お父さんはみんなを愛したいと願っておられるのです。このことを、お父さんは兄に伝えたのでした。

私たちも、もし他の誰かが神さまから祝福されているのを見てうらやましがったり、怒ってしまったりするとき、このお父さんの言葉を思い出すようにしましょう。そして、神さまは自分に対しても大きな祝福を与えていてくださるということを感じましょう。

ここには、弟と兄の二人の兄弟が出てきましたが、これは自分という一人の人間の中に、弟のようなどころも兄のようなどころもあるということです。好き勝手なことをしてはみじめで不安になってしまう自分、まじめにしているように見えて誰かをねたんでいる自分、どちらも自分の中にあります。でも、大切なことは、そのどちらにもお父さんは近づいてくださったということです。神さまは、私たちのためにイエスさまを与えてくださり、私たちのもとに近づいてくださる方です。だから私たちがまた、心から信頼して神さまのもとに帰るのです。

(石原知弘)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書15章24節

食べて祝おう。

この息子は、死んでいたのに生き返り、
いなくなっていたのに見つかったからだ。

〈ねらい〉

神さまのところ（礼拝や教会学校）から離れると私たちは罪を犯します。そのことに気づいたら、すぐに神さまところに帰りましょう。神さまは、罪を赦してくださり、そのことを喜んでくださいます。

〈展開例〉

放蕩息子のお話は教会に紙芝居があると思いますので、それを利用しながら、以下展開していきます。またこのお話をイエス様がみんなにして下さったことを強調して下さい。

（幼稚科では、弟息子のことだけに触れることにします。）

お父さんとは、神さまのことです。そして弟息子とは私たち人間のことです。（先生、子どもたち一人一人の名前を呼びながらお話しします。）

私たち人間は神さまに造られました。だから本当はいつも神さまのことを思って、一緒にいられたら一番幸せなことなのです。みんなが、大好きなお父さんお母さんと一緒にいて安心して暮らしているようにね。

弟息子は、お父さんから離れて、自分の好きなように暮らしたいと思うようになり、お父さんからたくさんのお金をもらいましたね。

弟息子は自分が楽しくなるように毎日遊んで暮らしましたから、お金はすぐなくなりました。

お金がなくなるとお友達もいなくなり、そして最後に食べるものもなくなりました。はだしになり、服もぼろぼろ、お腹もべこべこでもう死にそうと思ったときお父さんのことを思い出したのです。そして自分が悪いことをしたことを心からあやまろうと決めて家に帰っていったのです。

お父さんは弟息子を遠くから見つけて、走って

いって抱きしめ、食べ物、着るもの、履物を用意しお祝いをしてくれました。息子はどんなにうれしかったでしょう。心が温かくホカホカになりました。（みんなを抱きしめてあげてください。）

みんなは、悪いことしたら、それに気づいてあやまりましょう。そのことを神さまは喜んでくださいます。神様はなんて温かいお方なのでしょう。そしてイエスさまはそのことを教えてくださいました。教会に来て、イエスさまのお話を聞いて、神さまのところへ帰る道を教えてもらいましょうね。

〈やってみよう〉

放蕩息子は失われたものとなりました。息子はすべてを失ってはじめてもっとも大切なことに気づき、父の家へ帰ることができました。さあ、放蕩息子の絵をかいて、カードを作ってください。生徒の数だけ作ってどこかにかくしましょう。お父さんの絵、または家の絵を用意して、放蕩息子のカードを見つけた生徒はそこに貼って遊んでください。全員が見つけられたらゲーム終了。

これは余談ですが、この展開を考えながら、ロズさんだ歌があります。それは日本昔ばなしのエンディングテーマソング。これはある教会の幼児クラスの終わりにいつも歌いながら踊った懐かしい曲でした。「いいな、いいな、人間っていいな。♪……僕も帰ろ、おうちに帰えろ。でんでんでんぐり返ってばいばいばい」。

〈おいのり〉

天のさま、私たちが悪いことをしたとき、心から神さまに謝ることができるように、神様のところに帰ることができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈ねらい〉

この「放蕩息子」のたとえは、15章から始まっている「見失った羊」のたとえ、「無くした銀貨」のたとえと同じテーマです。すなわち、神様は、罪を犯し、神様から離れてしまったわたしたち人間をそれでも愛してくださり、わたしたちが罪を悔い改めて、神様のもとに立ち返るのを待っておられる、ということを教えています。

しかし、この「放蕩息子」のたとえでは、他のたとえ話以上に、神様から離れて生きることがいかに悲惨であるのかを教えています。また、自分勝手に神様から離れ、好き勝手にしている人間を、それでも愛し、赦してくださる神様の愛が、まさにわが子を愛する父親の愛として深く語られています。

子供たちの日常生活のことにも触れながら、わが子を愛する神様の深い愛について一緒に考えましょう。

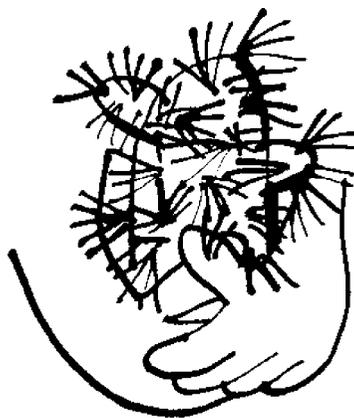
〈展開例〉

1. 弟はどうしてお父さんに財産を分けてくれるよう頼んだのでしょうか。弟の気持ちをみんなで考えよう。
2. 弟は財産を分けてもらった後、どうしましたか。

3. その後、弟はどんな生活をしましたか。また、その結果、どうになりましたか。
4. 飢え死にしそうになった弟は何を考えましたか。聖書から探して読みましょう。
5. 息子が帰って来たとき、お父さんはどんな気持ちになったでしょう。聖書の中にあるお父さんの行動から、その理由を考えよう。
6. お兄さんは、弟が帰ってきてどんな気持ちになりましたか。また、お兄さんはどうしてそんな気持ちになったのでしょうか。
7. お父さんはお兄さんより、弟の方が好きだったのでしょうか。
8. あなたがお兄さんだったら、どうしますか。

〈おいのり〉

愛する天の神様。神様の愛を忘れて、つい自分勝手に、わがままに生活してしまう私をお赦しください。しかし、それでも神様はそんな私をいつも見守って愛していてくださいます。どうか、神様の愛を忘れないで毎日生活できますようにお守りください。罪を犯したときは、神様に心からごめんなさいと言って、神様の所に帰ることができるよう導いてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。」

〈ねらい〉

罪人が悔い改めて神に立ち帰ることを神は何よりも喜んでくださる。

〈展開例〉**1. 三人のポイントを整理してみよう****〔弟〕**

- ・父がまだ生きているのに財産を分けてほしいと願った。→父の支配からのがれて、独立したいと考えた。
- ・父のもとを出て行った。→自由に自分勝手に暮らせば幸せになると思っていた。
- ・我に返った。→惨めな自分になって初めて、神様に対しても父に対しても罪を犯していたことがわかった。悔い改めて父のもとへ帰る決心をした。

〔父〕

- ・遠く離れていたのに、息子を見つけて→父は毎日毎日、息子の帰りを今か、今かと待っていた。
- ・走り寄って首を抱き、接吻した。→待っているだけでなく、息子を見つけると父の方から走りよって受け入れた。
- ・食べて祝おう。→いなくなった息子が帰ってきたことを心から喜んでいる。この喜びは祝宴を開く（共に喜び祝う）ほど大きい。

〔兄〕

- ・兄は怒って家に入ろうとしなかった。→父のやり方が不満。父の喜びが理解できない。
- ・いつづけに背いたことは一度もない。→自分はまだめで正しいと思っている。形式的に戒めを守っていたが、父の心から遠く離れていた。

2. 誰のことをあらわしているのか？

このたとえは、取税人や罪人を受け入れるイエス様に不平をいったパリサイ人や律法学者に対して語られたものです。父、弟、兄は誰のこ

とを表しているのでしょうか。

父……神様

弟……取税人や罪人（罪人と見なされていた人、大きな罪を犯した人、みんなから嫌われのけ者にされていた人たち）

兄……パリサイ人や律法学者（神様の掟を自分の力で守り、天国に入れると考え、教えていた指導者）

3. 弟と兄に対する父の愛

父は弟を見つけて走り寄り、抱きしめて受け入れます。神様は私たちが悔い改めて神様のもとに立ち帰るとき、喜んで迎え入れてくださいます。大きなゆるしと愛で包み込んでくださいます。

ここに出てくる弟とは、取税人や罪人のことです。イエス様はみんなから嫌われていた彼らの友となってくださいました。

そんな父に対して文句をいう兄は、もう一人の放蕩息子です。いつも父のそばにしながら父の心から離れていました。その兄に対して「あなたも私のところに帰って一緒に喜び祝おうではないか」と悔い改めの中に招きます。

神様の前に自分は正しいといえる者は誰もいません。イエス様は、自分が正しいと思っていたパリサイ人たちをも神様との交わりの中へと招いておられるのです。

4. 登場人物になったつもりで、手紙を書いてみよう

- ①弟から父へ……悔い改めの手紙
- ②兄から父へ……不満の手紙
- ③父から弟へ……ゆるしと喜びの手紙
- ④父から兄へ……なだめと招きの手紙

まず、それぞれの気持ちについて話し合ってみましょう。それから①から④のどの手紙を書くか選びましょう。できたら発表し合ひましょう。

〈今日のカテキズム〉

※参照カテキズムとして、子どもカテキズム問
21、67が挙げられています。

問21 神さまは、あなたもほかの人も、罪人を滅
びるままにお見捨てになりましたか。

答 いいえ、ちがいます。
神さまは、神の民となるように 最初から
私たちを選んでくださいました。罪から救
い出してくださいさあがない主を与えてくだ
さったのです。

問67 信仰と悔い改めとは何ですか。

答 聖霊のお働きによって与えられる、救いの
恵みです。イエスさまを救い主として受け
入れ、信頼することと、罪を認め、罪を憎
み、神さまに向かって歩むことです。

※命に至る悔い改めについて教えている問答を見
てみましょう。

ウェストミンスター小教理問答

問85 罪のため私たちに当然な神の怒りとのろい
とを免れるために、神は、私たちに何を求
めておられますか。

答 罪のため私たちに当然な神の怒りとのろい
とを免れるために、神が私たちに求めてお
られる事は、キリストがあがないの祝福を
私たちに伝えるのに用いられるすべての外
的手段を、忠実に用いて、イエス・キリス
トを信じ、命に至る悔い改めをすること
です。

問87 命に至る悔い改めとは、何ですか。

答 命に至る悔い改めも、救いの恵みです。そ
れによって罪人は、自分の罪を本当に自覚
し キリストにある神のあわれみを理解し
て、自分の罪を歎き憎みつつ、罪から神へ
と立ち帰り、新しい服従をはっきりと目指
し努力するようになるのです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	ルカ15：11～32
月曜日	使徒20：17～24
火曜日	箴言2：1～5
水曜日	箴言8：33～36
木曜日	イザヤ55：1～3
金曜日	エゼキエル36：25～32
土曜日	イザヤ1：15～17

先生方へ⑤

しかし、信仰の言葉を語ると言っても、言葉
を振りかざして、行いがながいしろになっ
ては、おかしなことになります。「行いを伴
わない信仰は死んだものです。(ヤコブ2：
26)」そう聞くと、何一つ聖書の戒めを守れ
ない自分に気づき、自分には聖書や教理問答
から語る資格はない、と思われるかもしれま
せん。しかし、わたしたちにも語れることが
あるのです、痛みを伴いますが。信仰の体験
談を話したことがおありの方なら思い出して
いただけるでしょう。信仰の言葉を語るとい
うことは、結局、自分の弱さをさらけ出すと
いうことです。問題は子どもたちの前でそれ
ができるかどうかです。先生面をしては
できないことです。むしろ、子どもたちと一
緒に神さまからみ言葉をいただくという気持
ちになり、子どもたちの目線に立たなければ
できません。

ですから、まずは信仰の先輩たちの言葉を借
りて、信仰について対話を始める。そうすれ
ば、そののち、自分たちの言葉で自由に信仰
について語れるようになっていくでしょう。
そのように育った人たちが集まったキャンプ
や修養会が実現するのが楽しみです。